

【 研究ノート 】

英語運用能力の変化の認知からとらえる学習者の意識調査
短期海外研修を経験した大学生の意識から

川内規会
(青森県立保健大学)

Students' Consciousness of Communication Skills
through English Language Learning:
A Study involving Students who Have Engaged
in Short-term English Study Abroad.

KAWAUCHI Kie
(Aomori University of Health and Welfare)

Abstract. Many universities have a system of studying language abroad and most universities have compulsory English classes as part of their curriculum. Students understand that English class is inevitable. However, many educators are of the opinion there is no point in studying English abroad for a short period, such as two or three weeks. We need to ascertain whether university students increase their motivation for language learning after short term English study abroad.

The purpose of this study is to understand how the feelings of university students about English communication skills and abilities are impacted by learning English for three weeks abroad. The present research used questionnaires and interviews to understand the consciousness of students who have experienced short-term language learning abroad and how they feel about their English communication skills in the basic four abilities and about vocabulary development through learning English abroad. In this research we find a new consciousness of the problems of language learning by students who recently studied abroad and a new awareness of the barriers to interpersonal communication.

0 . はじめに

国際交流が盛んになりグローバルな視点が問われるようになって以来、授業の一環として海外語学研修を設けている大学の数が多い。また、日本の多くの大学では、英語の学習が必修として置かれており、大学生にとって英語の学習は必然的なもののように捉えられている傾向がある。

かつて頻繁に研究の対象となっていた海外の語学研修に対しても、どこの大学でも行われ目新しいものではないと捉えられており、研究の対象として扱われなくなってきている傾向がある。しかし、一方では短期の海外語学研修に関して意義がないという否定的な声もあり、実際に大学生は、海外語学研修に対してどのような動機づけを得ているのか認識する必要があると痛感した。そこで現代の大学生が海外研修に参加した結果、英語運用能力がいかに変化したと認識しているかを把握するために調査を行うこととなった。

本調査は、青森市内の2つの大学で短期海外語学研修の経験のある学生から、海外研修により英語運用能力に変化があらわれたと認識しているかどうかを調査したものである。また、語学研修の現状を把握し、研修に参加した学生の語学学習に対する意識を調査するものである。これらの調査研究から、過去の調査と異なる現代の学生の語学学習に対する問題意識や新たなコミュニケーションの傾向が見られる点を考察していく。

1. 海外研修の変遷および調査目的

1990年代には、「海外語学研修」と呼ばれるものを、高等学校でも、また場合によっては中学校でさえ実施するようになり、現在では大学が海外語学研修を主催するのは半ば常識のようになっている。日本全国どの大学でも何らかの形で海外研修を行っている中で、外国語教育に力をいれているが海外研修は行わないという方針を持つことは困難な状況であるといえる。

しかし、これらの海外語学研修人気の裏では、英語教員が消極的な態度をとってきている例も少なくない。その理由として、引率業務が英語教員にのみ義務としてふりかかってくることを懸念した向きもあれば、それ以上に、短期のいわゆる語学研修の効果に疑問を抱いている場合もある。「夏休みに一ヶ月ほど海外に行くだけではさして英語教育上の成果を期待することはできず、たいていの場合は観光旅行に英会話練習をつけた程度で終わってしまう。そもそも、外国に行きさえすれば英語が上達するなどというのは幻想にすぎない。」(鳥飼、進藤、1996)という声も少なくない。さらに「外国での研修旅行中に発生した様々な事件やトラブルも聞こえてくる。そのような夏休みの研修旅行をなぜ大学がわざわざ主催し責任を持たなければいけないのか。外国で語学研修をしたい学生は、業者によるプログラムがいくらでもあるのだからそれを利用すればよい。」(p.15)という指摘もある。引率者の問題や、大学が主催することの意義、英語力の上達といった視点から考えると、確かに現時点でも様々な問題点があると思われる。しかし、学生にとっての学習の動機づけから考えると、英語教育上の成果は期待できないと完全否定するのは早いと考えた。

本調査は以上の点をふまえて海外研修に対する学習者の意識を調査し、さらに英語の4技能および言語運用能力、単語力など、学生の英語運用能力の認知から推移を分析した。海外研修により英語運用能力に変化があらわれたと認識しているかどうかを把握することが本調査の目的である。これらの調査において学生の実態を把握することは、これからの海外研修が学生の実態から離れた研修カリキュラムにならないためにも、また、海外研修が観光旅行的な団体ツアーにならないためにも必要な調査であると考えられる。さらに、大学で行われている英語の授業をベースとし、学んできたものを活用できる海外研修になるよう、英語教育を考える上でも大切な役割を果たすと思われる。

2 . 調査方法

本調査は青森市内の4年制2大学¹⁾から、海外語学研修を経験した学生132名にアンケート調査を実施した。対象学生の専攻は経営経済学科、看護学科、理学療法学科、社会福祉学科ですべて2年生である。対象者の研修先は、アメリカ、オーストラリア、イギリスの3カ国でそれぞれ3週間の語学研修を受けている。研修内容は、午前は語学学校で英語の授業、午後は自主研修となっており、授業を続けて受けている学生半数と、自主行動を行う学生がいる。週に1回の割合で午後に見学ツアーが組み込まれている。事前研修はどちらの大学でも行われており、学生はあらかじめ現地の情報や注意事項、研修プログラムの詳細などを得てから海外研修に参加している。

さらに、アンケート調査対象者の中から5名の学生から更に詳しいヒアリング調査を行った。対象学生はアメリカの研修に参加した経営経済学科の2年生2名と、イギリスの研修に参加した看護学科の2年生3名である。クラス編成はアメリカ研修では他の国の学生との混合クラスで、イギリス研修では、日本人学生だけのクラスであった。調査方法は1対1のインタビュー形式で実施した。

調査対象者は平日の朝食・夕食はホストファミリーと一緒にとり、週末はホストファミリーと共に行動している。そこで学生と一番長く持続的に接触している点から、主にホストファミリーとの接触を今回は調査対象とした。

アンケート調査の内訳は日常会話内容、母国語依存度、英語運用能力の認知などが中心である。また、ヒアリング調査では、研修中の様子と研修後の意識の確認として、コミュニケーションが困難であった事例と問題点、英語運用能力の具体的な認識、海外研修後の語学学習に対する意識などを質問した。

3 . 調査結果

はじめに、アンケート調査の結果を示すこととする。はじめて異文化に触れホストファミリーと接触したときの状況を把握するために、はじめての会話内容および日常における会話内容を調査し変化を比較した。

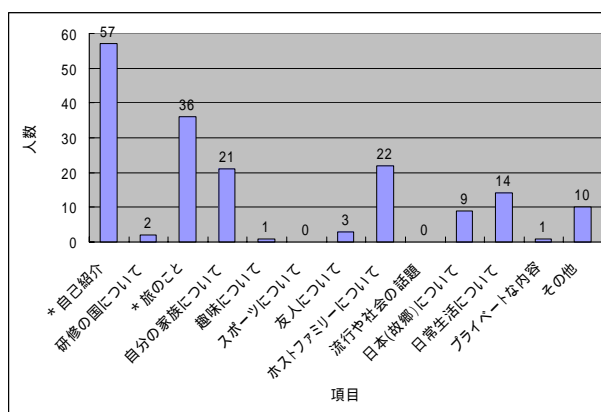


図1 はじめての会話内容

図1のように、はじめて見知らぬ者同士が出会う時は、当然ながら、自己紹介・自分の家族・自分の故郷など自分の背景となる事柄を話題とし、同時に相手先であるホストファミリーの紹介などが行われる。旅の様子の話題もはじめて取り交わされるコミュニケーション活動の点から見

ると、様子の説明や感想を伝えるなど受け身にならずにコミュニケーションを維持できる望ましい相互作用が働くものと思われる。また、これからホームステイをするに当たり、即座に実生活について話題にしたホストファミリーも多かったようである。しかし、少数回答やその中には、会ってすぐプライベートな話題になったり、ホストファミリーを引き受けるに当たっての愚痴を聞かされたり、自分の趣味だけ一方的に話し始めて、学生はどのように反応していいのが困ったという例もあった。

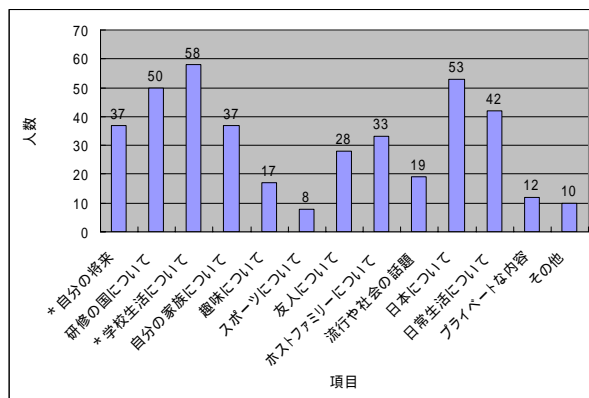


図2 日常の会話内容

*は図1と図2で項目が異なるもの

図2では、ホームステイの生活が進み、日常の会話内容がやや複雑になり深いものとなり、知識が問われたり、意見、考えを問われるようになると、学生も真剣にやり取りを行わざるを得なくなる。例えば、「日本について」(53)、「研修国について」(50)、「自分の将来」(37)、「流行や社会の話題」(19)などがそうである。特に、研修国の人、海外研修に参加している学生は当然研修国のことを学んできているだろう、興味を持ってきているだろうと考え、自国について多くの意見や感想を聞いてくる傾向にある。また、彼らは学生が母国である日本の様子は当然わかるものと考え様々な細かい質問をしているようだが、学生は自分の意見が伝えられなかったり、日本の現状があまり分かっておらず返答に困ったという回答が41名で全体のおよそ3分の1にも上った。そのことは、次の研修前に学ぶべきであった項目という質問に対する回答にも顕著に表れている。

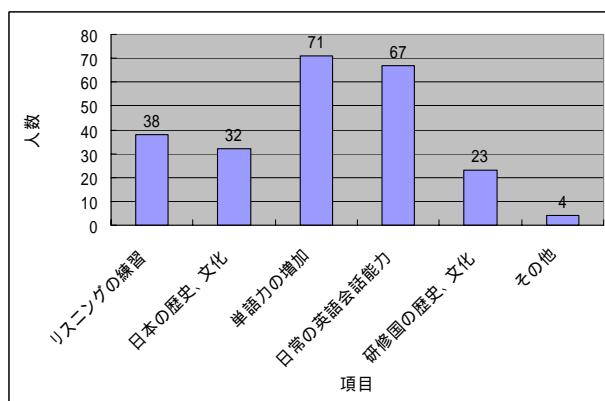


図3 研修前に学ぶべきであった項目

図3を見ても分かる通り、語学力としての「単語力の増加」(71)、「日常の英会話」(67)、「リスニングの練習」(38)という上位3項目は、多数の学生が学ぶべきであったととらえ、英語運用能力の乏しさを感じているようである。また、「日本の歴史・文化」(32)や、「研修国の歴史・文化」(23)に関しては、学生が異文化に接触する前にさほど重要視していなかった項目であり、実際に「自国の現状、立場、歴史を知らずに、聞かれたことに全く説明できず後悔した」と具体的に答えた学生が27名いた。答えられなかった項目の内訳は、過去の歴史的事実、日本の経済的立場、義務教育の詳細、現在の医療のあり方、福祉の現状、定年制度、国(地域)の政策などであった。また、研修国の事前学習を怠っており、研修国の歴史や文化をいかに知らなかったかを痛感している様子もうかがわれた。

続いて、生活環境を確認する目的で、ホームステイ期間中の1日の母国語使用の頻度を調べた。結果は以下のようになっている。

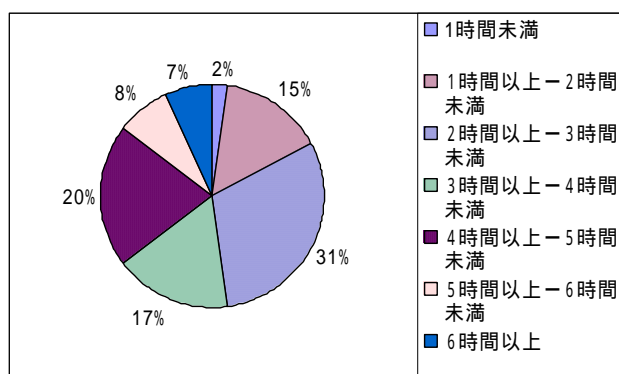


図4 日本語の使用時間

1時間未満が2%と少なく、1時間以上2時間未満が15%、2時間以上3時間未満は31%と一番多かった。また、3時間以上4時間未満が17%、4時間以上5時間未満が20%となり、2時間から5時間未満で68%と半数以上をしめていることになる。そして、5時間以上6時間未満は8%、6時間以上では2%と少数である。この結果から、語学研修先で授業中は英語を使用しているも、休み時間や自分達の時間になると、日本人は集まって日本語を使用している様子うかがわれる。

次に、英語運用能力として、「聞く能力・話す能力・書く能力・読む能力・単語力・コミュニケーション能力」の6つの領域に関して、大学入試以前、1年終了時、2年海外研修前、2年海外研修後とその能力がどのように変化したと認識しているか、0から4の5段階評価をつけてもらいその推移を調べた。6つの領域を選んだ理由は、基本的な「聞く、話す、書く、読む」の4技能に、基礎をなす「単語力」と、応用をなす「コミュニケーション能力」を調べることにより、英語運用能力に対する認知の詳細が得られると考えたからである。ただし、英語能力を判断する試験は実施していないため、あくまでも本人の認識として、どのように変化したと評価するかという調査である。結果は図5から図7を参照されたい。

聞く能力・話す能力に関しては、評価の形態が似た形を描いている。大学入試以前の聞く能力2.2、話す能力2.1に比べて1年の英語の授業終了時には、やや上がり(聞く2.7、話す2.6)、2年になり海外研修前はやや下がっている(聞く2.4、話す2.2)が、海外研修後には聞く能力3.7、話す能力3.2と大きくアップしている。

書く能力・読む能力は、評価の形態のみならず、評価自体がほぼ同じレベルを保っている。大

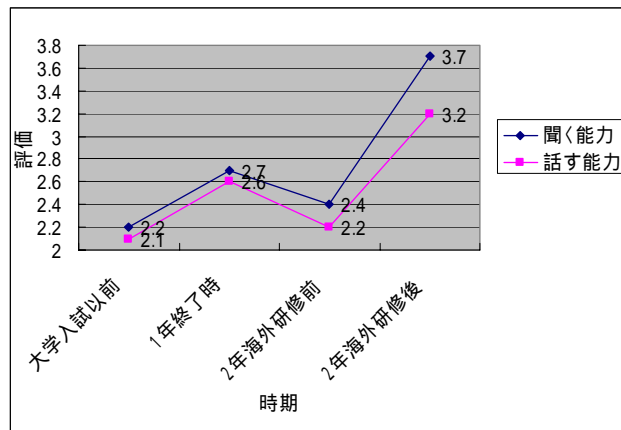


図5 聞く能力・話す能力の認知

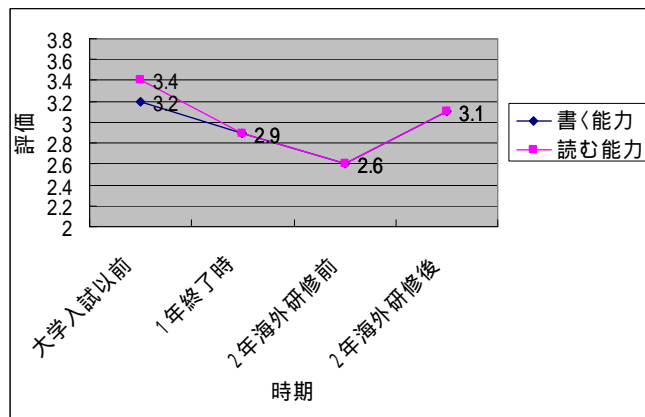


図6 書く能力・読む能力の認知

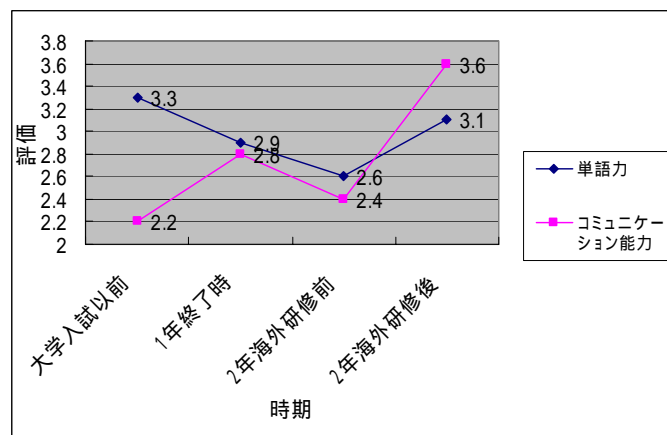


図7 単語力・コミュニケーション能力の認知

学入試以前の書く能力 3.2、読む能力 3.4 は、大学に入ってからやや落ちており（書く、読む共に 2.9）、海外研修前にはかなり落ちた（書く、読む共に 2.6）と評価しているが、海外研修後には両能力はどちらも 3.1 に上がっている。

単語力・コミュニケーション能力については興味深い結果が現れた。単語力は大学入試以前に

3.3 と高い評価をつけていたが、大学時代に徐々に低下し（1年終了時 2.9、海外研修前 2.6）、海外研修後には 3.1 にやや上がっている。これに対し、入試以前のコミュニケーション能力は入試以前の話す能力と同じ 2.2 と低い評価であった。しかし、1年終了時には 2.8 に上がっている。また、研修前の 2.4 に比べて研修後の推移は極めて高く 3.6 にアップしている。これは全体の能力と比較しても聞く能力の 3.7 に継ぐ高い評価である。

次にヒアリング調査の結果であるが、上記アンケート調査を裏付けるいくつかの結果が現れた。

はじめに、実際のコミュニケーションが困難であった事例をいくつか挙げてもらったところ、ヒアリング調査対象者である 5 名全員から「自分の国（地域）の情報が答えられなかった」という回答があった。「現地の国（地域）の事情が分からなかった」という回答も 2 名からあったが、現地の情報が分からなくても、ホストファミリーが丁寧に教えてくれたようで、コミュニケーション活動としての相互作用の点から捉えると、むしろ意見交換ができる望ましいコミュニケーションが行われていたといえる。しかし、自分の国である日本に関する質問になると、回答できないことがホストファミリーにとっては奇異であり、なぜ答えられないのか理解できないという態度をとられたようである。また、学生が頻繁に自分の国の情報が答えられなかったため、ホストファミリーから答えたくないと思っていると誤解されてしまった例や、ホストファミリーがいろいろな方法で回答を得ようとして質問ずくめになり、学生がホストファミリーとの食事時間の会話が怖くて逃げたいと感じたという例もあった。この 5 名の学生は、語学以外の基礎知識の学習も必要であることを再認識し、研修後に自力で学んだと答えていた。

さらに、4 名の学生は英語運用能力の問題点として、前述の図 3 および図 7 にもあるように、単語力が弱いことが全般的なコミュニケーションに大きく障害を起こしていると考えていた。1 つの単語が分からず、その単語を補う別な表現も使えず、そのままその話題をあきらめた例が 2 件あった。また、分からない単語を使われているにもかかわらず、それが何であるのか聞き返すことができず、最後まで理解できないままで会話が終ったという例も 3 件あった。このような状況では、対処の仕方が分からなかったことが原因で、基本的な 4 技能とは別なものとして、コミュニケーション能力が足りなかったと学生は感じていた。

ヒアリング対象の学生は、研修後にさまざまな形で語学学習を始めており、その必要性を十分に感じていた。具体的には、「英語の授業を真剣に取り組むようになった」、「単語力を増やす勉強をした」、「語学学校に通うきっかけになった」、「自分で英語の本を買った」、「英語の力を知るために勉強して英語能力試験をうけた」などの回答が得られた。

4 . 考察

全般のデータから、学生は言語運用能力に必要な基礎知識なしでは十分なコミュニケーションが図れないと感じていることがわかった。図 2、図 3 およびヒアリング調査から、異文化間で行われるコミュニケーションにはその背景となる文化や歴史、現状を知らないことが原因で、コミュニケーションが続かず、相互の意見交換ができなかったという結果が現れている。さらにそれらを事前に学習しておくべきであったと研修後に感じていることが理解できる。特にヒアリング調査では、ホストファミリーとの会話のみならず、語学研修の授業中でも自国の現状や歴史的背景を聞かれても説明できず、語学とは違う勉強が必要であったと全員が述べている。英語運用能力として英語の語学力の原因も含まれるが、媒体が日本語であったとしても、同じ結果であると

推測できることから、これらは言語運用能力に必要な基礎知識に問題があったと思われる。

さらに、多数の学生が研修後に語学学習の必要性を再認識したという結果が現れている。図 3 からわかるように、研修前に学ぶべき項目の中の「単語力の増加」、「日常の英会話」、「リスニングの練習」等は、コミュニケーションを図るのに即実践として必要不可欠な項目であり、学生は普通の会話レベルで苦心惨憺している様子が見られる。特に単語力不足は学生にとってコミュニケーションを図る上で、大きな障害となっているようである。ヒアリング調査の中で、研修後にあらためて語学学習をはじめたという回答からも語学学習の必要性を再認識したことがわかる。

次に諸能力の認知の推移から見ると、研修前と研修後を比較したすべての言語能力に関して、研修後に上がったと感じていることが明らかになった。また、その推移を分析すると、グラフの形状は聞く・話す能力ではほぼ同じ形を描き、また書く・読む能力でもほぼ同じ値を占めている。また、コミュニケーション能力は聞く・話すと同じ形を描き、単語力では書く・読む能力と同じ形を描いている。つまり、聞く能力・話す能力・コミュニケーション能力の認知では、大学入試以前の力は 1 年間の大学の英語授業後ではアップしている。2 年の海外研修前には若干下がっているが、研修後には大きくアップしたと認知している。これに関しては、カリキュラムの問題も含んでおり、1 年次の英語がコミュニケーション能力を中心とした、聞く・話す能力に焦点を当てた授業がなされていたことと、2 年次で英語の授業が行われていなかったことが原因と考える。カリキュラム上、2 年次では海外研修以外には英語の科目がなく、それまでの能力を維持できる機会が減っている。しかし、海外研修後はその能力を取り戻しさらにアップしたという自己評価がなされている。

一方、書く能力・読む能力・単語力に関しては大学入学以前の能力を高く評価しており、入学後は評価が下がっている。これは入学以前に大学入試に向けて単語力をつけるために、集中学習しているケースが多いためと推測する。しかしながら、単語力が劣ってきたと感じている大学生も、海外研修後には飛躍的にのび、高い評価をつけている。つまり、単語力の必要性を感じ、研修中もしくは研修後に学習をし、以前よりは力がついたと認識したのである。

これらの結果から、研修前に比べて研修後に諸能力がアップしたと学生自身は捉えていることがわかる。これは研修中および研修後に、学生自身の学習に対する姿勢として、英語運用能力がつくよう努力した結果の自己評価といえる。実際の英語能力は測定していないため、その程度は様々であると思われるが、レベルにかかわらず学習者が海外研修後に語学学習の必要性を再認識したことは明らかであると思われる。

5. まとめ

現代の学生は英語に触れる機会が多く、情報量が豊富な上に長年の英語教育でも実践が重視されており、かつてのように対人コミュニケーションにおいて消極的な者²⁾は少ないと思われがちである。しかし、今回の調査結果を見ると語学運用能力の基盤となる基礎知識が乏しいことや、学習不足を痛感するなど、基本的なコミュニケーションに大切な常識、情報がかけていたことを語学研修後に認識している点から、現代の学生も自ら率先した語学学習の大切さを感じていることが理解できる。「察し」のコミュニケーションから「語る」ことに重きをおく国際社会（北出、1997）に対応できる能力を養うために何が必要かを知る手がかりとなったのではないと思われる。

る。

海外語学研修が大学で主催しなくてはならないかどうかという点に関しては、周りに流されることなく、それぞれの大学で現状の問題点を挙げ、海外研修の学生への効果を再検証することにより、各大学の目的にあった姿になるよう変化していくことが望ましいと考える。英語の授業も海外研修も、意義と効果を再考し見直していく必要があると思われる。しかし、問題点が多いことにより、海外語学研修は英語教育の観点から意味がないとみなされ、おろそかにされてしまうことは学生の語学学習に対する動機づけの一つを失うことになるため残念である。少なくとも語学学習の必要性を認識するきっかけとなった学生がいる限り、大学主催の如何に関わらず、なんらかの海外研修の機会は学生に与えられ続けて欲しいと考える。

註

- 1) 青森市内の県立大学 1 校および青森市内の公立大学 1 校
- 2) バーンランド(1973) は日本人の学生に対する意識調査を行い、コミュニケーションから見た日本人のプロフィールを「遠慮する・改まっている・黙りがち・用心深い・つかみどころがない・真面目」の順で報告している。

参考文献

- バーンランド、D. (1973) 『日本人の表現構造』 西山千・佐野邦子訳, サイマル出版会。
北出亮 (1997) 『日本人の国際コミュニケーション』 近代文芸社。
鳥飼玖美子、進藤久美子 (1996) 『大学英語教育の改革 東洋英和女学院大学の試み』 三修社。